

小田の行き戻り

つちだりゅうたらう
土田龍太郎

朝に置き夕に消ゆる露の命のはなかさながら夢に似たり。束の間の夢の内にここかしこあてどなくさすらへゆくがごとくなれば旅にもはた譬へつべし。かく一期を旅に擬ふるはさらにめづらしからで言古りにたれども、草枕結ぶばかりのかりの臥所にしばしやすらふまでこそはあらめ、いづくをつひのよるべとも頼みがたきままに迷ふほかなき一世のありさま、旅ならずとはさすが言ひがたかるべし。

一期を旅に擬へむにその品さまざまありて人ごとに異なるはさることにて、前つ世のくすしき契りのかひにてもやあらむ、長き旅路のそのはてになべてのものえ及ばぬ高きさかひに至りて上なき安らぎを得るためしたえてなきにあらじ。かかる賢者の業績、凡下のやがてまねぶべきものにしあらねば、はるけき道の跡をばただ仰ぎ慕はむほかさらにせんなるべし。

人の世の旅おほかたは長く苦しきものにてすすろに危ふき目を見ることさへ少からず、さはれおのづからなる幸ひはたなきにしもあらずとせば、善しとも悪しとも一方には定めがたく、禍福あひ半し苦樂もごも至ると言ひて止みなむにしかじとぞおぼゆる。

ここに老いしぬるおのが来し方のなにくれつくづくと顧るに、わびしく拙きことのみ想ひ出だされてものぐるほしきこと譬へむ方もなし。およそ旅とは、遠くはるけき方、まだ見ぬところを尋ねゆくをこそさいはめ。はかなくて過ぎにしわが一期、見渡すほどの家近きわたりの野邊をただこなたかなた行きつ戻りつありきたりしにことならず。かかるむなしき営みまことの旅に比ぶべくもあらざるは言はでもしるかるべし。

かく思ひくしたるままに先つころ、芭蕉翁句集をなに心なく見ぬたりしに

世を旅に代かく小田の行き戻り

といへる句おのづから目とまりたり。これ拙きわが一期をさながら十七字の内に言ひつくせるがごとくなれば、うち見るにただ想ひのほかの心地してあさましきことただならず。

さはれかの蕉翁の一期の旅、わが来し方よろづ拙きのなぞふべくもあらぬは言ふもさらなり。そもこの句いついかなるをりにかの翁ものしけむ、さらにつまびらかならねども、名古屋に住めりし荷今の家に寄りて尾張わたりの親しき人々と再び會へるを喜べる時の吟詠をおぼしければ、一句の心さまでまめまめしからず、いはゆる挨拶吟と見なさばことたりなむかし。

この俳聖の心の内いかにてもありけむ、ふと口より出でさせることなき一句、はからざるにわがいふかひもなき生涯をながむるはしとなりぬること、げにおもしろしあやしと言はでやはあるべき。

(令和二年一月二十七日受附)